時間旅行ムナカタ Plus №6

朝鮮通信使と宗像

～『新修宗像市史』近世部会から～

朝鮮通信使とは？

朝鮮通信使とは、朝鮮国が国王の国書などを携えさせて日本に派遣した外交使節団です。信を通わす使節ということで通信使と呼ばれます。江戸時代、12回来日しました。そのうち11回は将軍のいる江戸で国書の交換が行われました。

江戸まで赴く使節を各藩がもてなし、福岡藩黒田家領では「藍島」（糟屋郡新宮町相島）に客館を設け、饗応（きょうおう）の場としたことはよく知られています。約５００人の使節をもてなすため、福岡藩領全域にその負担が課され、現宗像市域も例外ではありませんでした。台風と推測される影響で海が荒れた際には、地島に滞在したことが少なくとも２回ありました。

地島滞在

正徳元（１７１１）年来日の通信使は、８月26日寅中刻（午前４時頃）、相島から出船しましたが、「四時頃」（午前10時頃）、地島の前を航行していたところ、鐘崎辺りの潮の流れのため、未刻（午後２時頃）、地島に入りました。下関に向けて出船したのは３日後の29日でした。

享保４（１７１９）年来日の通信使は、８月10日朝、朝鮮通信使の船と、迎接役の対馬藩主宗義誠（よしのぶ）の船が相島から出船し、赤間関（下関）に向かいました。しかし、同日昼過ぎ、芦屋沖を航行中、逆風が強く、波が高くなったため、地島に引き返しました。酉刻頃（午後６時頃）、地島に着き、三使（正使・副使・従事官）の宿所は西光寺とされました。18日卯中刻（午前６時頃）、三使の船・供船など全ての船が地島を出船しました。

本来の「御馳走所」である相島から地島への食料・物資輸送が難しかったため、福岡から直接地島に送られました。奈多浦（福岡市東区）までは船で、奈多から鐘崎までは陸上輸送し、鐘崎から地島まで海上輸送しました。また、三使以外の朝鮮の役人も船中泊ではなく上陸したいということで、浦人の家５軒が宿所に充てられています。

相島出船前の取り決めでは、風不順で赤間関に渡れない場合、地島には入らず、相島に戻るということでしたが、従事が体調不良となったため、地島に入りました。８日間にも及ぶ滞留は地島の人々をはじめ、福岡藩にとって大きな負担でした。

饗応の準備

天和２（１６８２）年の記録から宗像の人々がどのような役割を果たしたかを紹介します。

通信使の船が航行する際、玄界灘の島々が合図の「火立所」（のろしを上げる場所）とされ、大島・地島も含まれていました。

また、鐘崎浦の弁指（べんざし、浦役人）である三右衛門は饗応のための活魚を調達・管理する「活魚裁判」を命じられました。大変な苦労であったと推測されます。

さらに、大島と鐘崎の海士（あま）15人が藩から集められました。毎日、相島に近い新宮の海岸で、鮑（アワビ）、栄螺（サザエ）を獲ることを命じられましたが、通信使の到着直前になっても必要量に達しません。そこで、藩は両者に競争をさせ、勝った鐘崎の海士に米１俵を与えました。

他に通信使の饗応膳「七五三膳（しちごさんぜん）」に必要な伊勢海老の調達が大島に命じられ、二、三十の伊勢海老が用意されました。

通信使が帰国する際には、相島に食料の鶏が集められました。筑前国内の各郡に割り当てられ、合計１１６１羽の鶏が集められ、宗像郡からは最多の２３９羽の鶏が提供されています。他にも、赤間宿御茶屋（本陣）の金屏風１双が相島に運ばれました。藩士の所持品や領内各御茶屋の諸道具が集められ、相島に運ばれることもありました。藩の総力を挙げての饗応だったわけです。

海上交通の要衝であり、豊かな漁場であった宗像。朝鮮通信使を饗応する上で欠かすことのできない地域だったのです。

（近世部会　守友隆）

現在の海雲山西光寺（浄土宗）

筑前国図（天保国絵図　部分　国立公文書館蔵）
大島・地島・神湊・鐘崎周辺